

形

forme

「特集」
感覚を凝縮して



日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

[日文](#)

[検索](#)

开 + 多

Nr.08

かたちについて、ここで、あらためて。



concept & design: Kazuhisa Yamamoto (Donny Grafiks)
AR contents: Takaumi Furuhashi (Wake up)

ひ
と
は
み
な

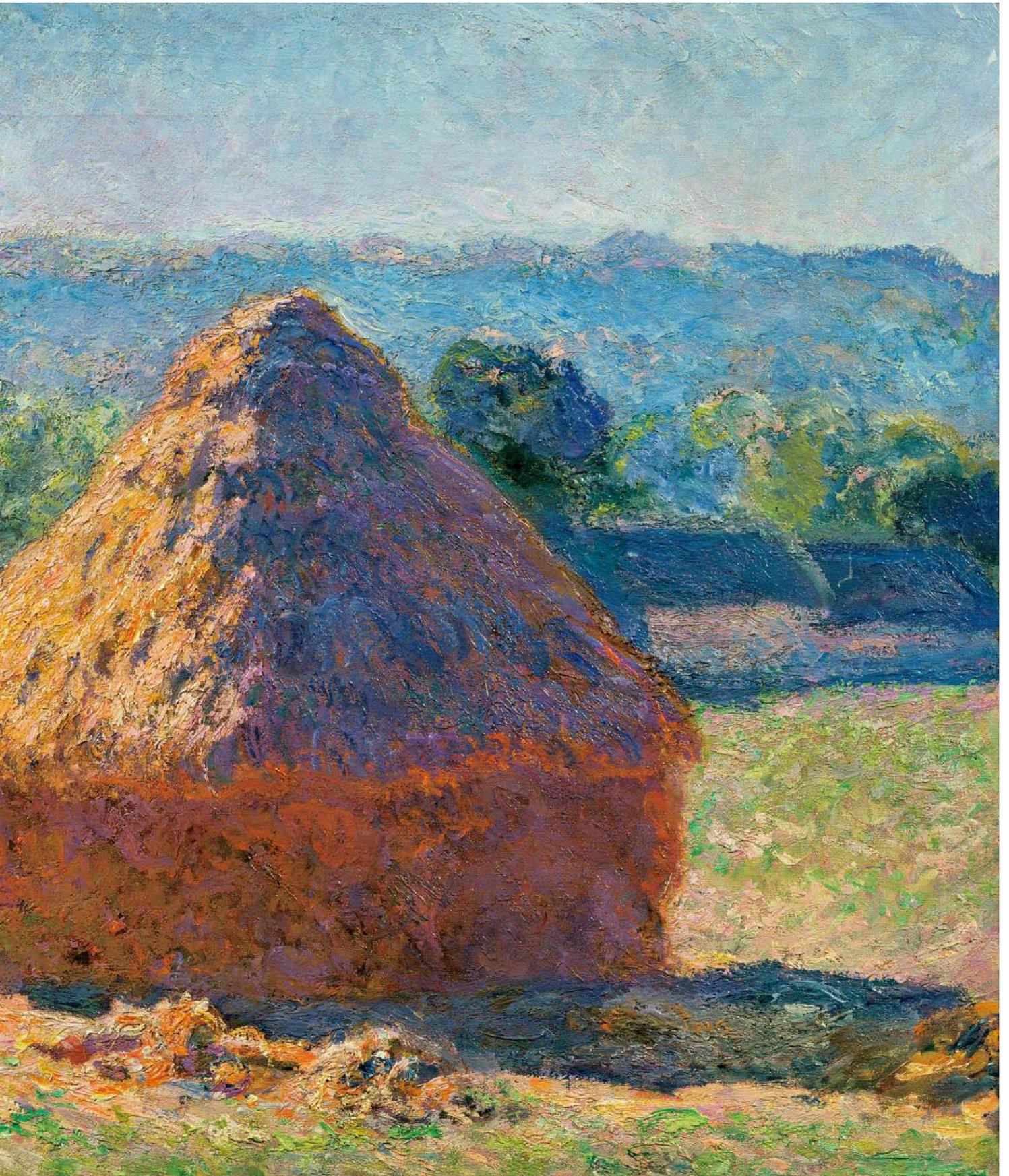
心
の
な
か
に

海
を
ひ
と
つ
も
っ
て
い
る

そ
の
濃
い
緑
の
海
の
う
え
に

と
き
ど
き
ち
い
さ
な
魚
が
は
ね
て

と
き
ど
き
ち
い
さ
な
が
た
つ





自分の物差しに世界をあわせようとするのは誤りなのです。自然をよく理解しなさい。そうすれば自分をよりよく理解できるでしょう。
—クロード・モネ

積みわら 夏の終わり 朝の効果 [油彩・キャンヴァス／60×100cm] 1890～91 クロード・モネ [1840～1926] オルセー美術館蔵
photo:UNIPHOTO PRESS

感覚を凝縮して

日本には四季があり

その移ろいを感じ、楽しむ文化があります。

和歌や、衣装、庭、調度品……。

中でも和菓子は全身の感覚を働かせて味わうことのできる

日本文化の代表とも言えます。

歴史や、造形の発想や工夫を知ること

「和菓子のデザイン」はもっと楽しく、

もっと価値のあるものになるかもしれません。





P.6「山路の錦」 P.7上から「紅葉重ね」「竜田の里」「初瀬の錦」

和菓子の魅力を味わう

和菓子のデザインは季節や自然物を思い起こさせます。

その工夫はどのように表れているのでしょうか。

また、そこから見えてくる日本の美意識とは何でしょうか。

長年、和菓子の歴史と意匠を研究してきた

中山圭子さんにお話をうかがいました。

和菓子研究のきっかけ

—中山さんが和菓子と出会ったきっかけについて教えてください。

中山 最初に和菓子の意匠の面白さを感じたのは高校生の時です。友達に誘われて参加した学校のお茶会で紫陽花の形の和菓子が出たのですが、あん玉のまわりに賽の目切りの紫色の寒天がちりばめられていて、卵白を泡立てたものがかかっています。「お菓子で紫陽花を表現できるなんて、すてきな……」と思いました。

大学では美術史を専攻していましたが、研究者になるつもりはありませんでした。ですから卒業論文を書くときも就職を考えて生活に関連する方がいいかなと思っていました。父親が食品関連の仕事をしていたので、日本料理の盛り付けの美しさなどもテーマとして面白いかもと思って調べていま

た。そんな折、本屋さんでとらやの江戸時代の菓子絵図帳が載っている京菓子の本を見つけたのです。絵図帳は今という商品カタログのようなもので、桜や山吹の花、霜柱などをイメージしたお菓子の絵図が載っているのを見て「こんなデザインが江戸時代からあったんだ」と驚きました。

—学生時代は、具体的にどのようなことを研究されたのでしょうか。

中山 季節の風物を表したお菓子が広まるのは元禄時代、つまり活気ある町人文化が京都や大阪を中心に花開いた時代です。最初に私が試みたのは、江戸時代の絵図帳に描かれたお菓子の銘と意匠の分類でした。和菓子につけられた銘（菓銘）を五十音別にし、どのような傾向があるのか、またその意匠の特徴などを調べ、「和菓子の意匠」



金しほ



白羊巻



玉舟



花のり



「遠桜」



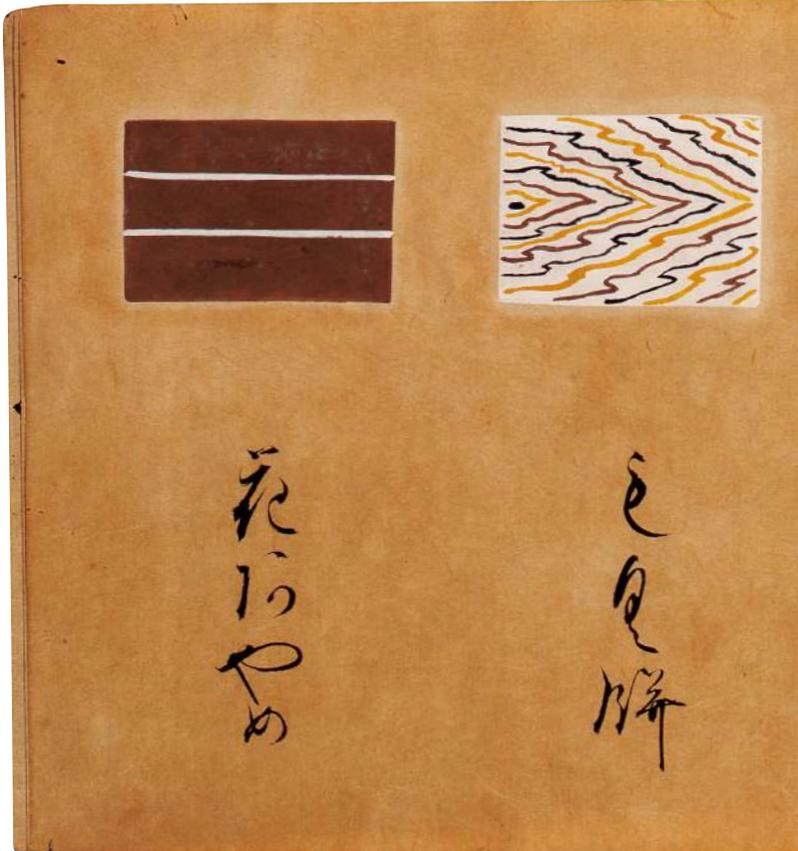
「岩根のつつじ」



「初秋」



「花の王」



元禄8年(1695)の『御菓子之畫圖』

というタイトルで卒論にまとめました。
モチーフで言うと、やはり花鳥風月が多いです。特に植物のモチーフが多く、なかでも梅と桜と菊は代表的です。動物ですと、慶事に欠かせない鶴や亀、歌に詠まれた雁や千鳥などがよく見られました。

―表し方の特徴はありますか。

中山 表現はお店によっていろいろあつて、モチーフの何を強調するか、何を表現したいかによっても違います。例えば桜ですと、花の全体的なイメージか、花一輪の美しさかなど。また、適度に造形を省略し、洗練された美を考えます。例えば蜜が写実的だとちよつと食べにくいですね。品が

あつて、おいしそうに見えることは大切です。

京都と江戸、今でいえば京都と東京での表現の違いもあります。朝顔のお菓子を例にとると、東京では花の形が一目でわかるようにつくり、露やつる、葉などを添えることがあります。一方、京都では円い形に花の色を思わせるほかしを入れるなど、抽象的な意匠を好む傾向があります。

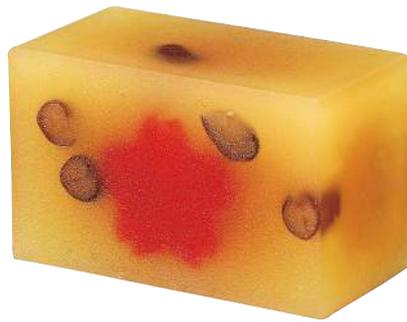
見立ての面白さ

―表現の具象的、抽象的の違いは、使い分けなどするのでしょうか。

中山 具象的、抽象的と言っても、食べるときには「これは抽象的だ」と意



「紅梅染」



「雲井の桜」



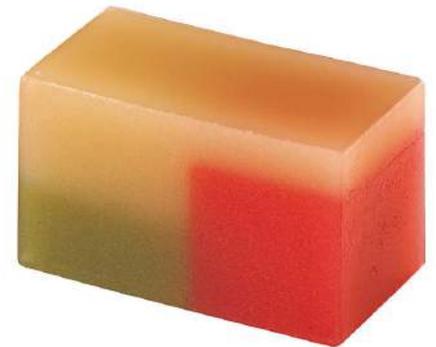
「藤の棚」



「照紅葉」



「春もよう」



「識のみち」

識するのではなく、菓銘とのつながり
で見た目を楽しむのだと思います。
例えば「遠桜」は、あん玉にそぼろ
あんをつけてつくるきんとんです。紅
に白のそぼろが点在しているさまを見
「遠桜」という菓銘を聞くと、遠くの
山に点々と咲く桜が想像できる。お菓
子の色かたちを見て、菓銘を聞いて、
そのイメージを連想するわけです。

—色の表現の工夫が大切になりますね。
中山 色も、一口に紅と言っても、「遠
桜」の紅は薄めに、「岩根のつつじ」
に使うそぼろは、つつじの花を意識し
て濃いめになど、違いがあります。

それからお菓子を切ったとき、中に
あんが入っていることも魅力ですね。
生地とあんの配色により、切り口の印
象も違ってきます。例えば「雪餅」だ
とまわりは白で中が黄色、雪明りを思
わせます。

うつろいを楽しむ

—色の取り合わせによっても、連想の
広がり方が変わるのでね。

中山 「春隣」も色から連想を楽しめ
るお菓子です。黒いそぼろのきんとん
に、黄色いそぼろがちょんとついてい
る。「春隣」という菓銘は冬の季語で
すが、春が近づいていることを意味し
ていますので、黄色からは、福寿草の
花などが連想されますね。

—ある一つの季節を表すというより、
季節の変化を表しているのですね。

中山 二十四節気や七十二候という言
葉が思い出されます。季節のうつろい
を表した和菓子は多いです。例えば、
緑、黄、赤に色分けした楓形のお菓子
は、徐々に紅葉していくさまを思わせ
ます。
それから「初秋」や「初時雨」など、
菓銘に「初」という言葉がついたもの
も、季節の変わり目を感じさせてくれ
ますね。

—菓銘を聞くと連想が広がるというこ
とを考えると、菓銘はとても大切で
すね。菓銘のつけ方の工夫がありますか。
中山 植物の異名を使うということも
あります。朝顔を「鏡草」、牡丹を「花
の王」と言うなど、優雅な言葉の響き
を楽しめます。日本語再発見という感
じですね。昔の人はそうした遊び心
もっていたのでしょうか。

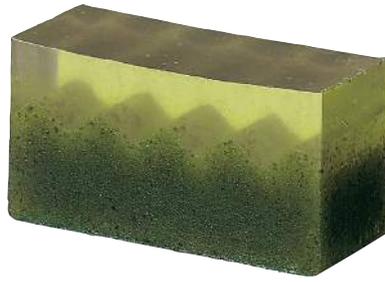
今の楽しみ方としては、自分で銘を
考えてみてもいいですね。お店では「初
蛸」の銘で売っているけれど、自分だっ
たら「蛸川」や「蛸狩り」にしたいな
どと語ったり、旅先で見た紅葉を思い
出したり、話題を広げられるのが和菓
子の楽しみ方でしょう。

—楽しむためのきっかけとして、和菓
子の造形や菓銘が工夫されているのだ
と感じます。そのためにも、季節感を
盛り込むのでしょうか。

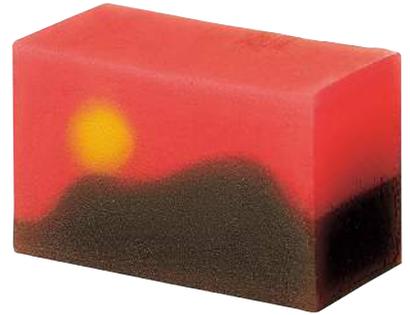
中山 季節の風物というのは、日本人
の誰もが親しみを感じるし、共通の話
題になりますね。日本は四季の移り変
わりが繊細で、文学や絵画の題材にな



「水の宿」



「新茶の雫」



「新更科」



「夜の梅」



「馬駆ける」



「雛衣」

るなど、さまざまな分野に影響を与えています。和菓子もその一つと言えるでしょう。

和菓子は伝統文化の入り口

「子どもたちに和菓子のデザインを学ぶ際に注目してほしいことはありますか。」

中山 学校の授業をきっかけに、その場限りでなく、長期にわたって、歳時記を読むように楽しんでもらえたらなと思います。例えば近所の和菓子屋さんに行つて、一年間を通じて四季折々にどういう銘、デザインの和菓子がつくられているのかを見てもいいですね。

実際に、小学校五年生のときに虎屋文庫の展示を見たことをきっかけに、和菓子に興味をもち、一年間、とらやのお菓子の種類が変わるたびにスケッチしたという学生さんがいました。とらやで作成している菓銘解説も書き写して、帳面にまとめていたのです。その帳面を、今年になって文庫スタッフに見せてくれたのですよ。とても細かく丁寧に描かれていました。一年間続けるのと菓銘を通じていろいろな季節の言葉が学べます。

今年から使われている小学校五年生の国語の教科書の一つに、和菓子についての私の文章が載りました。和菓子を手始めにして、ほかの和の文化、お茶や漆、陶器などについて調べて発表する内容になっています。和菓子を通じて、日本の文化に興味をもち、世界

を広げてほしいです。

子どものときに美しいと思ったものはいつまでも印象に残るのでは？ 私も高校生のときに紫陽花のお菓子を見て魅かれたことがずっと心の片隅にあります。

和菓子はさまざまな感覚で楽しめるものです。見た目の美しさ（視覚）、菓銘の響き（聴覚）、そして、柚子、蓬、桜葉などの素材の自然な香り（嗅覚）、製法によって異なる「なめらか」「しっとり」「もっちり」といった食感（触覚）、おいしさ（味覚）があります。ぜひ感覚を働かせて楽しんでほしいですね。

「中山さんが考える和菓子の魅力とは何でしょうか。」

中山 日本文化を体感できることでしょうか。歌に詠まれ、絵画に描かれるなど、日本人がなじんできた自然風物が和菓子のモチーフになっています。それが甘くおいしいものとして、味わえることに魅力を感じますね。和菓子を通して、昔の人々の季節感や美意識に思いを馳せることができるのは素晴らしいですね。自分も関わって楽しめるのですから、とても創造的だと思います。

中山圭子 なかやまけいこ

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。和菓子のデザインの面白さにひかれて、卒論に「和菓子の意匠」を選ぶ。現在、虎屋の菓子資料室、虎屋文庫の専門職、虎屋取締役。著作に「江戸時代の和菓子デザイン」（ポプラ社）、「和菓子のほん」（福音館書店）など。

和菓子デザインの発想

小さな世界に四季を織り込み、見る人、食べる人を楽しませる和菓子の世界観を、作り手はどのように表現しているのでしょうか。お客様の要望に合わせて、オリジナルの和菓子をデザインし、製造する「オートクチュール」の経験がある職人に、和菓子を形にするための工夫を聞きました。

「らしさ」を求めて
特徴をクローズアップ

和菓子のデザインを考えるとき、決まった手順はないのですが、私の場合、モチーフをスケッチすることから始まります。

例えば羊がモチーフであれば、まずは写真的に羊を描いてみる。図鑑やインターネットなども使いますが、やはり実物を目にするのがいちばんです。色や質感など外見的特徴がつかみやすくなるだけでなく、息づかい、動き、周囲の環境など、そのモチーフから広がる情景に奥行きが出てくるからです。描きながら、より羊らしさを表現するにはどこにフォーカスすればいいのかを考えます。毛のふわふわした質感、ぐるっと曲がった角、あるいは視点を

引いて、草原の中にいる群れ……。モチーフそのままではなく、特徴を数センチ四方の小さな立体にギュッと凝縮することによって、見た人に「想像する楽しさ」が生まれる点が、和菓子の面白いところですね。

素材や技法も考慮しながら、モチーフの特徴をとらえ、シンプルな表現にしたものが最終的なデザインになります。その後は、試作を通して頭の中のイメージと実物を一致させる作業。例えば茶室で召し上がるのがあらかじめわかっているような場合は、ほの暗い空間でも映えるように明るめの配色にするなど、微調整もここで行います。オートクチュールのお菓子はあくまでお客様が主体であるため、菓銘（お菓子の名前）をつけませんが、後ほどお客様から「こんな菓銘をつけたよ」



奥：デザインの発想の種となるノート。スケッチや調べた季語などがつまっている
手前：具体的なデザインを構想するためのアイデアスケッチ



アイデアスケッチから実際につくられたオリジナル和菓子。
右：花吹雪 左：花菖蒲

とおっしゃってくださることもあります。一般的には、お菓子のデザインが具象的であれば菓銘は抽象的にします。例えば、植物の異名や和歌から取り、言葉の響きを楽しむことができず。お客様の中でお菓子—菓銘—知識が結びつくことになって、大きな景観を連想できるものになります。逆にお菓子が抽象的であれば菓銘は具象的にすることで、見立てを楽しみ、イメージをすることが出来ます。

そして、複数のお菓子を詰め合わせにして提供する場合、全体で一つの世界観を構成します。近景を表したものと遠景を表したものを並べることで、お菓子としてさらなる広がりが出ます。時間の流れを表現することもあります。そのほか色の淡い・濃い、形の丸い・四角いといったバランスに配慮して、一つの季節やテーマを多面的に味わってもらえるように工夫しています。

インプットの積み重ねが デザインセンスを磨く

和菓子は特に季節感を大事にするので、四季の移ろいには敏感でありたいと思っています。過去には、十二か月それぞれの季節や花と花言葉、行事などをノートに書き出してみたこともありました。今でも季節を感じる風景や動植物を見かけたら、よくスケッチしています。

秋の夕日のグラデーションは、空にどう溶け込んでいるか。すすきは風にどのように穂を揺らせているか。萩の

花や葉の付き方は。何となくイメージできていたつもりでも、描くことによって、わかっていたいなかった部分が見えてきます。細部を知っているほど、そぎ落としたデザインにした後、「そのものらしさ」が強調される気がします。また「きんとん」のように、色とその組み合わせにより花鳥風月、情趣を表すこともあるので、和菓子のスケールの大きさは計り知れません。

本や美術館で、古今東西の美術品に触れることも刺激になりますね。浮世絵の金魚がこんなに生き生きとした姿に見えるのはなぜなのかとか、日本と西洋の文様にはそれぞれどんな特徴があるのかとか、インプットした情報をきっかけに考えたことが、次のデザインのヒントになることもあります。

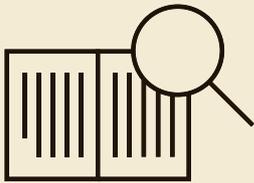
季節を捉える視点の違いに 面白さを感じてほしい

和菓子には数百年の歴史があるので、一般的に使われるモチーフ、それを引き立たせる形や色、表現するための技法などに、ある程度の「定石」があります。

黄緑色と言えば、草木が芽吹いてきた様子を表す色で、他の和菓子屋さんでもだいたい春先に使われます。ほかし、絞り、ヘラ入れといった技法も基本的なものがあり、それぞれが技術を身につけるため、日々努力をします。

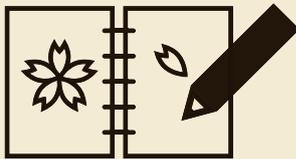
ひと通りの知識や技術を身に付けるために必要な期間は、およそ十年でしようか。職人として新たなお菓子の

和菓子のデザイン工程 (例)



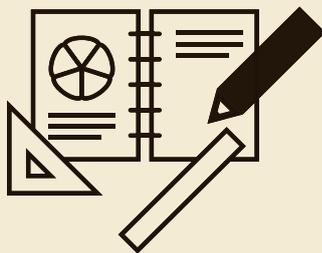
情報収集

モチーフとなるものを直接観察したり、図鑑やインターネットの画像を見たりする。理解を深めるために関連した文章を読むことも。



スケッチ

モチーフをスケッチして、細かな部分の造形を確かめる。描きながら、特徴を表している部分を探す。



デザイン

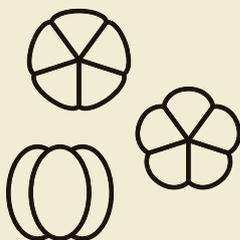
表現したい特徴をとらえ、シンプルながらも端正な形のデザイン画を描く。使用する素材、技法も同時に考える。



菓銘をつける

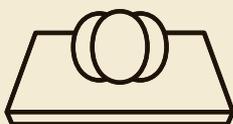
デザインと調和した菓銘を検討。自身がつけることもあれば、他の人がつけることもある。

※菓銘からデザイン案を考えることもある。



試作

実際の素材を使って、立体的な造形をつくる。デザイン画と見比べて修正を繰り返す。



完成

デザインをするのであれば、「定石」である知識や技術を頭の中で自在に組み立てる力が必要です。そういった和菓子に共通する考え方をより知ったうえで、お客様が召し上がる場面を想像しながらつくれば、より深い味わいのお菓子がつくれると思います。ただその一方で、学校の授業などで和菓子をデザインする

時は、まずは何にも縛られず自由な発想でモチーフを解釈してほしいとも思います。同じ紅葉を見て、それぞれがどの部分をどう表現するのか。感性の違いを楽しまれてはいいかがでしょうか。そして和菓子が、身の回りの四季の変化に興味を持つきっかけになってくれたら、と願っています。旬を

一か月ほど先取りして季節の移り変わりを知らせる役割が和菓子にはありますが、外に出かけた際には、普段よりゆっくり時間をとって日本ならではの四季の美しさを再発見してもらえたらうれしいですね。

「設場の」 「定の」

交流する鑑賞編

文
新関伸也
滋賀大学 教授
イラスト
danny



図画工作科や美術科の鑑賞学習において、児童・生徒の積極的な交流を目的とした時に、作品を「一斉に見せるか、グループで見せるか」を吟味することは、とても大切なことです。

「一斉」鑑賞では、美術館での実物作品をはじめ、教室の前面に掲示したりスクリーンに投影したりした、大きめの複製画や児童・生徒の作品などを見ることとなります。同じ作品を同時にクラス全員が注目して見る鑑賞となるため、教師は児童・生徒の表情を読み取りながら、全体に発問することができます。特

に「対話による鑑賞」や二つの作品を比べて鑑賞する「比較鑑賞法」などに適しており、様々な感想や意見を全体の前で発表して、交流を深めるのに適した学習形態といえます。教室で行う場合、机や椅子の置き方や使用の有無、教室の照明にも気を遣うことが大切となります。

次に、「グループ」鑑賞では、児童・生徒が四、五人に分かれて、一緒に手元で作品鑑賞する方法が中心となります。各個人の感想や批評を代表者がまとめて発表したり、カードゲームを取り入れてグループで遊びながら鑑賞する学習に適



しています。これらは、全体の前で発表するよりも個々が気軽に話すことができ、そのため、多様な見方で交流しあうことを目的にした授業に向いているでしょう。

いずれにしても鑑賞では、作品の細部が明瞭に見えることが大前提になります。実物作品は別ですが、質のよい複製画の提示を心がけましょう。そのような意味で、質のよい複製画の見られる教科書掲載作品の積極的な活用を望みたいところです。

先
ず
見
る

之儿目儿

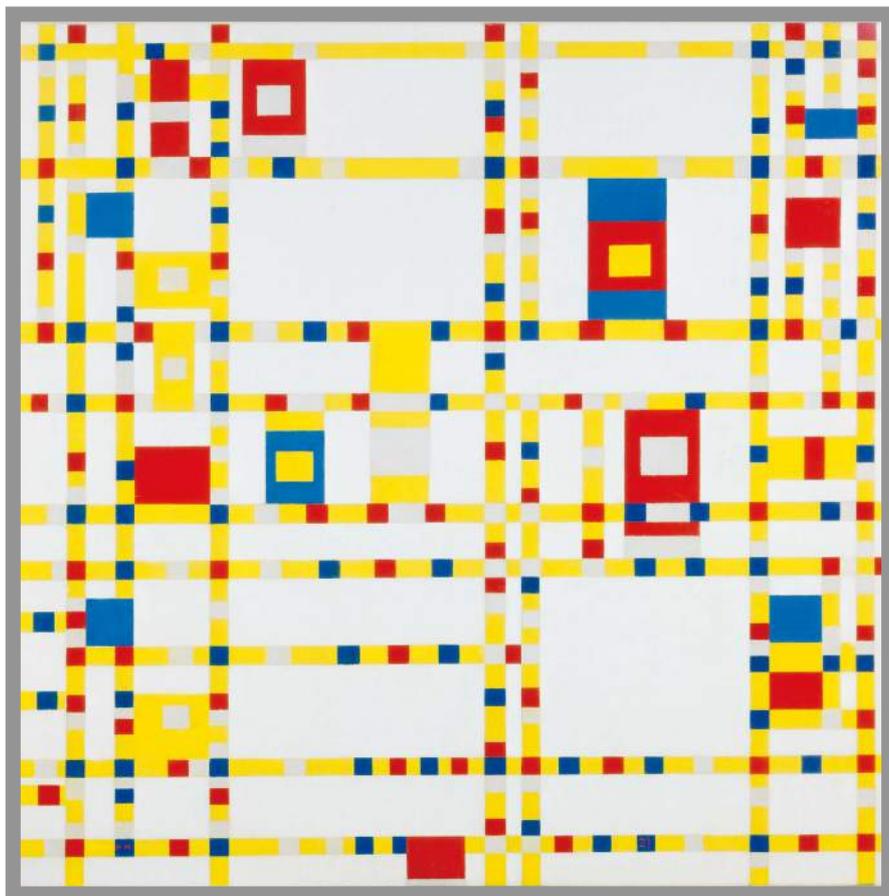
第十一回

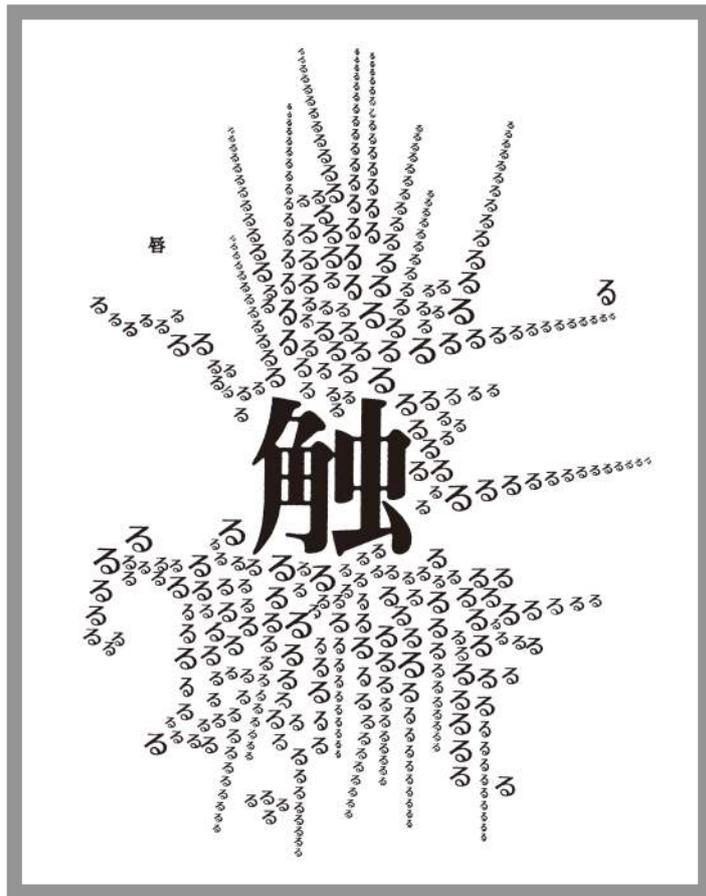
感じと袋小路とアナロジ

いまぼくの目の前には象の形の貯金箱とマグカップが置いてあって、卓上ライトの光に照らされて、けっこういい感じですよ。色合わせか、形のバランスか、それともぼくの気分によるのか、ともかく、いい感じですよ。しかしこのいい感じって、なんなのでしょう。

と、こういう具合に美術も楽しめると思うのです。意味のない気まぐれな机上の配置にふと見入るときのように、目に見えている調子というか、雰囲気というか、いい感じの「感じ」にあたるところを、ていねいに目の中で転がしてほしいわけです。今回は、このあいまいな「感じ」の、ごく微量のエネルギーの観測方法を考えてみることにします。

美術を見るときは、刺激がとても小さい感覚を味わうことは、人によってはなかなか耐えられません。正座で足がしびれるみたいに、目はじっとしていられない。モンドリアンの「ブロードウェイ・ブギウギ」は、むしろそんなせつかな目にはありがたい作品かもしれません。むしろエピソードがたくさんあるのです。まず、これは作者の人生最後の完成作。三年前の一九四〇年、戦火を逃れて米国に亡命してきた七一歳のモンドリアンは、ニューヨークの都市風景と、リズムカルな大衆音楽に骨抜きにされてしまいました。その集大成がこの作品。タイトルもわかりやすい。縦横のラインはマンハッタンの街並み、彩り





はプロードウェイに輝く電飾でしょうか。限られた色の反復はもちろんブギウギのリズムでしょう。

けれどこれらの情報は、この絵を見たときの「明るい感じ」「楽しい感じ」をもう一段深くするのに充分でしょうか？ 背景の知識は、むしろ目のしびれを加速し兼ねません。「感じ」の袋小路を、いかに回避するか。そして、いかに見る時間を持続させるか。ここに知恵を働かせる余地がありそうです。

この絵のダイゴミは、やはり画家がほれたブギウギと、色と形のリズムのシンクロ具合です。ならばいっそ、この絵を見ながらブギウギを鳴らしてみるのはいかがでしょうか。手拍子とステップを加えればいっそう愉快。歌詞もつけましょう。「プロードウェイ・ブギウギリズムウキウキ、心ズキズキワクワク……」いやこれは「東京ブギウギ」からの拝借ですが、そもそも、リズムや響きの組合せが何より大切な歌詞などの韻文は、相性が抜群で当然。美術館でも、ほんとは歌ったり踊ったり呑んだりしながら見ればさっとわかりやすくなることでしょう。

つまり、アナロジー（類推）をつなげて微弱な「感じ」を増幅させたわけです。左の図は、詩人の新国誠一によるこの方法の実践例。新国は、「触る」という感覚のニュアンスを、文字のレイアウトによって増幅させました。さあみなさんもやってみましょう。俳句はどんな形で、盆踊りはどんな色でしょうか？

成相肇 なりあい・はじめ
東京ステーションギャラリー学芸員。一九七九年生まれ。府中市美術館学芸員を経て、二〇一二年から現職。主な企画展に「石子順造の世界」、「デイスカパー、デイスカパー・ジャパン」など。

授業実践

学びのフロンティア

5・6年向き

カードをかくせ!

表現と一体化した鑑賞のススメ

京都光華女子学園 光華小学校 宮川紀宏

はじめに

「彫刻作品を見て」ねえねえ、これ何でできているの?」「油絵を見て」これって私たちが使っている絵の具といっしょ?」「リトグラフの作品を見て」これも版画なの?どんなインクを使っているんだろう」

図画工作の指導で、美術作品の図版を使ってアート・ゲームをしたり、話し合ったりしていると聞こえる子どもたちの発言です。興味深く作品を鑑賞していますが、一方で、美術作品はどこか非日常のものであり、特別なものとしてとらえている気がしています。特別なものだからこそ意欲的に「見る」のだと思っていますが、特別なものの故に学んだことと子どもたちの日常が繋がりにくいのではないかと印象もあります。授業の中で見た美術作品と、廊下に飾られた自分たちの作品や教室に飾られている花、使っている筆箱のデザインは子どもたちにとって別物であることが多そうです。

授業実践

導入で

本題材は、与えられた四角形のカード（はがき1/3程度）を、自分で選んだ場所と同じ色に着色したり、同じ模様をその形や色などを慎重に見ながらかき込んだりして隠してしまうという活動を楽しむ、表現と一体化した鑑賞の題材です。カードを隠すために絵の具やコンテ、鉛筆などを工夫して使いながら表現する中で、何度も形や色などの造形要素と対峙することができま

す。活動内容を提案した後、絵の具とコンテ、色鉛筆のそれぞれの特徴を話し合いしつつ、子どもが気づいていない点については指導します。

話し合いが終わると部屋の中や廊下を慎重に見てまわり、場所選びをします。建物の中ですから人工的に着色された場所が多いのですが、そこに付いている模様や汚れ、傷などもじっくりと見ていました。

場所が決まった子どもから、パ



レットに絵の具を出し始めます。そしてまるで「挑む」ように絵の具を混色していきました。

活動の様子

「白だと思ったけど、少し黄色っぽいな」「凸凹があるからその影で

少し暗くなるんだな」

子どもたちは場所の色や模様を見ながら材料を選び、工夫しながら表現をすすめていきました。

- ① 場所の色や模様などを見る
- ② パレットの絵の具の色を見る
- ③ 混色してできた絵の具を付けた筆先を見る
- ④ 筆先を選んだ場所に近付け交互に見る
- ⑤ 決心したようにカードを着色する
- ⑥ カードを場所にあてがい、にっこり笑ったり首をかしげたり、またそばにいる私や友だちに意見を求めたりする

といった様子が見て取れます。これが、絵の具でなくコンテであれば削ったりすり込んだりして、同じようなことを繰り返します。どうしても選んだ場所の様子に近付けないときには、アドバイスを求めてくる子どももいました。そのときは私も一緒に考えます。また、よく似た場所



を選んでいる友だちとの交流の中で解決していく児童も多くいました。

おわりに

活動のまとめとして自分のカードを選んだ場所にかくし、お互いに鑑賞していました。

「これ、言われないと気づかないね」「これは少し赤すぎかな」「本物のチョークを使うなんて、思いつかなかったよ」「柱の錆のカサカサした感じが色鉛筆でもでるんだな」「かかれてあった絵の具の汚れが本物の汚れのようでびっくりした」など、経験したからこそその感想が生まれ、和やかな雰囲気の中、徹底的に見るといふ活動を終えました。

「思っていた色と全然違った色だということに気付きました」「何度も繰り返し色を塗り直していると、

愛着がわきました」「うまくかくせなかったけど、色って奥が深いなあと思いました」といった感想の言葉からも「身近な美術」に気付く機会になったのではないかと思います。



指導計画	
時間	3時間
領域	B鑑賞
材料・用具	画用紙、水彩絵の具、コンテ、色鉛筆など
学習目標	自分で選んだ身近な場所に擬態するようカードを着色する活動を通して、形や色などをとらえる。
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ●カードをかくしたい場所を選ぶ。 ●複合的に材料を工夫して活動をするため、カードをかくそうとする活動から選んだ場所の形や色、テクスチャーなどを積極的にとらえる。 ●友人の作品を見たり、もらったアドバイスを参考にしたりしながら、さらに隠れるように表現を続ける。 ●互いに隠したカードを探しあい鑑賞する。
主な評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ●選んだ身近な場所と同じようにカードを着色する活動を通して形や色などの面白さを味わおうとしている（造形への関心・意欲・態度） ●選んだ場所の形や色などの特徴をとらえている（鑑賞の能力）

授業実践

学びのフロンティア

中学校 2・3年生向き

マイ・オリジナルカレンダー タブレットで進む「協働」の学び

愛媛大学教育学部附属中学校 大川博司

はじめに

美術の授業で生徒は自分なりのイメージをもって活動に取り組みます。しかしその際、自分だけで完結せず、他者とかかわり、互いに感性を刺激し合うことで、徐々に自尊心も高めることができるのだと思います。

今回は、タブレット端末をコミュニケーションのツールとして使用する場面を設定することで、その感性を刺激し合うための仕掛けとすることを考えました。

タブレット端末には、カメラ、録音機能がついています。そこで、毎回の授業で生徒に制作途中の作品を撮影させて、その画像を基に、毎回の振り返りをグループで話し合っ練り合う時間を設けたのです。話し合いを録音することで、生徒には発表するという意識が備わります。個人での制作が中心になる活動においても、他者に伝えることを前提にタブレット端末を取り入れることで、

コミュニケーションツールとしてうまく使えると考えました。

手立てと子どもの学び

この「マイ・オリジナルカレンダー」の題材では、何年の何月をデザインするのは自由です。「なぜこの月にするの?」と聞くと、「自分が二十歳になる年の月だから」「自分が生まれた年の月を選んだ」など、それぞれ思い入れがあり、ここから主題が生まれていくのです。

一年生でのデザインの基本の学習を生かして、自然物をモチーフにデザイン化していきますが、そのモチーフ選びも、カレンダーの機能を考え、選んだ月の季節感などが表れるように考えます。ここでもうまくタブレット端末を活用できます。インターネットの画像検索です。例えばタマネギを調べるにしても、タマネギが一つだけ写っている画像もあれば、たくさん並んでいるものもあ

りますし、断面がわかるものもあります。同じものでも多様な画像が一挙に見られるのは便利です。

モチーフのどのような特徴をとらえるのか、画面の中心に一つだけ置くのか、反復させるのかなど、具体的な構想に発展させていきます。

表現方法はポスターカラーでの彩色が基本ですが、表したいことに合わせて方法を工夫するように伝えま



す。モチーフを反復するデザインなら、コピーをしてもよいですし、モチーフを切り抜いてコラージュのように表現してもよいです。

生徒には、工夫したところ、つまりいているところを撮影して記録するように伝えます。撮影するタイミ



「おわりに」

ングは、毎回の授業開始時だったり、制作の途中だったり、生徒の判断に任せます。そして、必ず授業の最後には四人のグループになって、考えたことなどを共有する時間を設けます。この時、話し合いを必ず録音させることで、後で教師が評価などに生かせるのも利点です。

タブレット端末は、恒常的に活用することで、積極的に自己を開いて他者に働きかける姿勢を、生徒に身につけさせるためのツールです。話し合いの活動を継続的に行うことで、少しずつ自分の表現意図について自信をもって説明したり、互いのアイデアを認め合ったりする雰囲気が育ちつつあります。

個人での活動が主になる制作活動においても、振り返りを共有し「協

指導計画	
時間	12 時間
領域	A 表現 (2) (3)
材料・用具	タブレット型パソコン、画用紙、鉛筆、ポスターカラー、定規など
学習目標	カレンダーとしての機能を踏まえて季節感のある画面を構成し、色彩を工夫して表現する。
主な学習内容	アイデアスケッチや配色計画を通して季節感のあるカレンダーのイメージを固め、ポスターカラーで彩色する。表現活動を振り返り、相互評価及び自己評価を行う。
主な評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ●生活に潤いを与える視覚伝達デザインに関心をもち、自分らしい表現を工夫しようと主体的に取り組もうとする (美術への関心・意欲・態度) ●形や色彩などの効果を生かしてわかりやすさや美しさなどを考え、表現の構想を練り深める (発想や構想の能力) ●自分の表現意図に合う表現方法を工夫するなどして創造的に表現する (創造的な技能) ●デザインの目的や機能と調和のとれた表現の工夫を感じ取り、自分の価値観をもって刺激し合うことで、美意識を高め幅広く味わう (鑑賞の能力)

「働」することで、互いに刺激し合い、作品の完成という大きな目標のために前向きに努力をするようにさせたいです。



1
126,991,255

文：田野隆太郎
写真：新井卓

第十一回

曾谷朝絵



あえて言葉にしないが、日常生活で気になる、あの感覚。それは、自分の深いところで何かと結びついているという。絵は、感覚を伝えるための装置。

ならば、装置が結ぶ何かとは、鑑賞するわたしたち。

この絵が静かに覚醒させるのは、鈍りゆくわたしたちの感覚だ。

初めて見た彼女の作品は、白い壺のようなものを真上から捉えた小さな油絵だった。壺の中には水が張られている。表面にある波紋は大小重なりあっているが、それぞれの形を崩さない。画面全体は、大きくわけて青から黄、そして緑へと変化する色のつらなりがあり、暖色のアクセントが入っている。波は独立したさまざまな色を持つが、それらが混じり、濁るといふようなことはない。壺や水といった具体的なモチーフはある。静物画に仕上げることも可能だ。だが、そうしない。モチーフの個別の形や色を一旦整理し、それらを単純化した上で描きだしている。

ここまで書いてはみたが、これは絵の前に立ち、目に映ったそのままのことだ。構造を説明したにすぎない。でも対象が魅力的なら、まだ発見されていない特長を見つけ、それに拮抗できる言葉で表してみたいと思う。だから、作品の前で意識を集中させてみる。だが、頭では簡単に解釈させてくれない。どうもこの絵は、自分の感覚というものにダイレ

クトに訴えかけてくるように思う。絵の前に立ってただ感じればよい。解釈するよりも、見ることで、それ自体を続けたい……自分の悩みを尻目に、絵がそう言っている気がする。ゆるやかに洗練されたこの絵には、言葉での修飾を拒むほどの強さが潜んでいるのかもしれない。

作者の名は、曾谷朝絵。彼女が生み出す作品には、どんな特長があるのか。それを考えるには、一旦絵から離れてみるのかもしれない。卓近な例だが、先日ラジオの音楽番組に自分がリクエストした時のことを記したい。

その番組はリクエストのテーマを定めず、リスナーに任意で曲を募る。横浜の局なので、自分が日頃「横浜っぽい」と感じている曲を送った。外国人歌手が歌うソウルミュージック。詞には、横浜に触れた個所はないが、聞くたびになぜか横浜を連想する曲だった。

DJは「どこが横浜っぽいのか教えてほしい」と一言添え、リクエストを流した。曲を聞きながらわかっ

たのは、自分で言いだしたにもかかわらず、その理由をこれまで考えてこなかったことだった。

自問しつつネットを眺めていて、驚いた。番組リスナーが次々に反応していたからだ。「言葉では表現しづらいけど、たしかに横浜っぽい」「横浜というより、カタカナのヨコハマかな」「何となく本牧あたりだよな」……意外だった。勝手な先入観が、なぜこれほど賛同されたのか。

曲と町に、目に見える関係性は無い。ゆえに、リスナーたちは、曲から連想したある「感覚」だけでつながることに喜びを感じているようだった。自分も実際そうだった。

曾谷の絵の周辺にも、これと似たコミュニケーションがあるように思う。描かれた絵の意図を、鑑賞者が改めて言葉に置き換えなくても、絵を見て受けた「感覚」だけで理解できてしまう……そんな関係。鮮烈にデビューしたバスタブの作品にしてもそうだ。

「絵って平面だけど、たとえばお風呂に入った時の感じ……水に触れた

り、湯気を感じて血の循環がよくなったり、心臓が鼓動したり。そういう感覚をもって、見ている人を包む装置のようなものをつくりたいと思っただけです」

これは、これまで絵画では触れられてこなかった領域の話をしているのだろう。日常生活で気にかかっていたことや、意識の下に隠れ、取り立てて考えていなかったこと。自分では説明しづらかった感覚が、一枚



カラーインクを用いたドローイング。

の絵として目の前に現れたことにわたしたちは驚く。尚かつそれが、見ることの快感と共に伝わってくる。だから、鑑賞者の中に感動が膨らみ続ける。好きな曲のメロディは、いつまでも聞いていたい。彼女の絵の前に立つことは、音楽を聞く行為に近いのではないか。

「なぜバスタブを描いたのかというと、それは自分のよく知っていることでないと人を説得できないと思っただけです。人の顔も描いてみただけ、家族であつてもよく知らない。一番実感しているものは、それは錯覚であつても自分の身体で直接感じとつた情報だと思ふんです。普段の生活ではわざわざ人に説明したりしないけども、気になることがある」

そう実際に聞いても、彼女が「感覚を表現する」という難題に挑戦し続けていることが不思議だ。いくら実感したことであつても、感覚というものは個人の主観でしかない。絵を見るだけで、作者と同じような感覚が得られる……そんな高度なコミュニケーションを、一からつくりだすことは容易でないからだ。

彼女は、実際のバスタブや、その写真を見ながら描いていないというこれは、個人的なものでしかない「感覚」に普遍性をもたせるための仕掛けだろう。

バスタブの作品であれば、まずは入浴時の記憶から、身体全体で受け取った「感覚」をたぐりよせる。そ

こから気にかかった断片を取り出し、自分で納得がいくまで咀嚼する。そして混ざり合った「実感」と呼べるものを、改めてキャンバスに構成する。あくまでも、鑑賞者を「包むような装置」をつくるために、個人的な感覚を他人が領けるものへと慎重に変換しているのだろう。

描いたら、一旦絵から離れ、遠くから眺める。その作業を、彼女は必要以上に繰り返しているという。描く時間よりも、離れて見る時間の方が長い。独りよがりにならないよう、第三者として厳しく見ているわけだ。

「感覚」を伝える方法はわかった。しかし、まだ疑問が残る。

彼女は、社会へのプロパガンダのために絵を描いているわけではない。とはいえ、現代美術の潮流に乗った商業的な作品でもない。いわばテーマにしやすいものを選ばず、ある感覚を伝えたい」という内的な発露から出発し、軸をぶらさず貫徹させている。はたして、そのモチベーションだけで、長年、絵を描き続けられるのかということだ。

「絵を描きはじめる、作品の中に『命』のようなものが生まれるんです。そうすると、命が『こうしてくれたい』と素敵になるのよ」という声を発しはじめる。それがもの凄く強い。だから、わたしはその命のためにどうしたらいいかを考えるんです」

幼い頃から、こうして絵と話を続

けてきた。いつも両親がクレヨンや広告チラシを机に置いてくれたので自然と描きはじめた。幼稚園から帰るバスの中でも絵と対話していたという。

もちろん、絵だけではなくピアノや水泳もやった。でも、彼女がやめたいと言えば、両親は意志を尊重してくれた。だから習い事で時間を埋めるようなことはなく、自分が何を好きで、何をやりたいのかを考えるための時間が持てたという。その時間の中で、ものをつくることのモチベーションが育まれていった。芸大受験のため予備校に入り、技術に長けた浪人生を見ても慌てなかった。

「もちろん、上手い人の技術を取り入れることもありましたが、でもそれよりも自分が描いている絵や、描く対象そのものが教えてくれることの方が強いんですね。人の真似をしようと思つても、その人の中で続いていたストーリーと私のストーリーは違うので、そのまま真似しても無駄。結局は、自分との対話がないと強い作品にはならないと思ふんです」

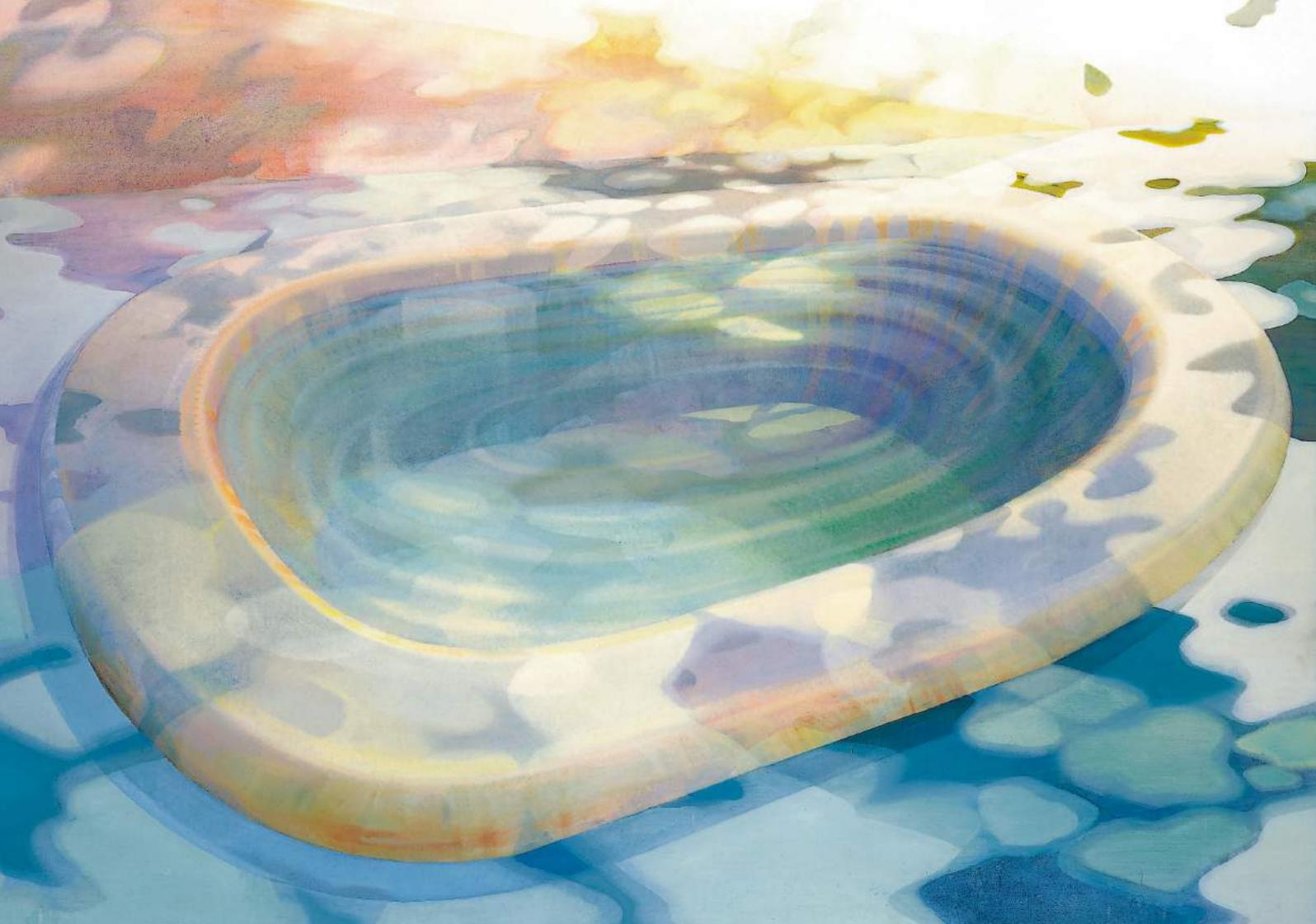
一貫した姿勢は、大学入学後、自分のテーマを見つけ出す必要に迫られた時に生きてきた。絵に、そして自分に向き合えば取り組むべき課題は見えてくる。そこで、彼女が自覚的に行つたのは、いま実感している。その感覚に向き合うことだった。

「アーティストとしては、周囲を見て、自分ができることは何かということとは考えます。でも、つくつてい

て実感があるもの、これは自分がやるべきことなんだ、ということをやっている時の感覚は、飯のものをやる時とはちがいます。やっぱり、自分には実感があるものを選んできたっていうことなんです。そうしないと仕事にはならなかった。だから、絵と対話し続けているんです」

曾谷は若くして多くの賞を取り、脚光を浴びた。近年は絵画だけに安住せず、インスタレーションやパブリックアートへも創作の場を拡げている。興味深いのは、いくらメデイアが変わろうが、一度生まれた「命」は消えず、さまざまな作品の中に現れるということだ。その命を育て続けていくことが、作家としての存在理由にもなっている。もちろん、いい状態を維持するには、一時の感覚に惑わされないよう、確かな感覚を見極め、対話を続ける努力が必要になる。

だが、対話の際、自分の意に沿う感覚だけを抽出しては作品が非常に浅薄なものになるのではないだろうか。色が綺麗。形が美しい。そう一言で表せる絵があつてもいい。でも、技術に長けただけの絵なら、百年後、千年後の世に残ることはないだろう。残るのは、後世の人々も納得できる、ある普遍の感覚が宿る作品だ。曾谷は筆を握る時、自分に正直に、いま実感していることに向き合っているのはもちろん、さまざまな記憶をも呼び起こしているの



Bathtub [油彩、キャンヴァス／164×226cm] 2001 第一生命保険株式会社蔵

はないか。そこで、過去の後悔や判断に悩んだことにも思いを馳せているのではないか。

心から嬉しいと感じた出来事を、迷った末に自分の中だけに押しとどめてしまったこと。誰かに伝えたかったが、結局はそれが些細なことだと諦めてしまったこと……そんな言葉にできない感覚。彼女は、感覚の負の面に、他人が頷ける普遍性があるのを知っているのではないか。

彼女の絵の前に立った時、言葉が出なかったのは、人生の陰影が垣間見えたからだと思う。無類の色彩感覚でわたしたちを魅了する絵の深層には、曾谷の中で納得してきたさまざまな感覚、いわば、生きた証のようなもの that 刻まれている。『感覚を表現する』ということとは、片手間の余技などではなく、自分が日々を生きる中で感じてきた一瞬一瞬を肯定したいという強い意志の現れなのだろう。

彼女の姿勢を学びたいと思う。わたしたちは、気づくとパソコンやスマホをネットにつなげ、未来のことばかり予想している。自分を省みる時間が極端に少ない。生活に手ごたえを感じられないのは、信頼できる思考回路を持っていないからだと思う。ならば、彼女のように、その瞬間その瞬間に自分が全身で感覚した情報を直視してみればいい。それはメディアから得られる情報よりも、実ははるかに複雑で重層的であり、

そのなかにはもちろん、心地いいだけではないものもある。しかしその中から実感できる感覚を探すことは、これからの人生を前進させる回路をつくることになるはずだ。

彼女が感覚にこだわる理由は、日常に沸き起こる数多ある感覚からひとつでも多くの実感を見つけたという欲求が強いからだだろう。彼女にとっては、実感を伴う充実した人生に導いてくれる最良の方法が、絵を描くということなのだ。そのシンブルだが奥の深い作業を彼女は今日も続けている。

曾谷朝絵 そやあさえ

二〇〇六年東京藝術大学大学院博士後期課程美術研究科にて博士美術（取得・絵画・インスタレーション、映像などを制作。二〇〇一年「昭和シエール石油現代美術賞」、グランプリ、二〇〇二年「VOCA展二〇〇二」VOCA賞、二〇〇三年「横浜文化賞文化・芸術奨励賞」、「神奈川文化未来賞」他、受賞多数。主な個展に、二〇〇〇年「鳴る色」SHISEIDO GALLERY／東京、二〇〇三年「宙色（sora iro）」水戸芸術館／茨城、二〇一五年「虹」Aki Gallery／台北、などがある。平成二五年度文化庁新進芸術家海外研修員としてNYのISCPにて滞在制作。

<http://www.morning-picture.com>

●とともに学ぶ

図工・美術の先生と子どもが、ともに作りだす学びの日々。

●子どもの言葉から

「先生のあの授業おもしろかったなあ。あれを超えるのは、まだないねん」

その授業をして二年後に、ある子どもに言われた言葉でした。

この子どもは図画工作の授業がある
と、最後、図工室を出るときに「今日
のおもしろかった」とか「これはいま
いちだった」など、いつも授業について
感想を言ってくれていました。簡単な
言葉でしたが、「そんなこと思っていた
のか」と授業をふり返り、見つめ直す
よいきっかけになっていました。その最
後の振り返りが、最初に書いたあの言
葉です。

子どもたちがどんなときにおもしろ
いと感じるのか、逆にいまいちと感じる
のかを、子どもの活動中の様子や会話
を分析して、次からの授業に生かして
いくことを大切にし、これからもどの
子どもたちも楽しむことができる授業
をめざしていきたいと思います。そして、
この子どものように「つでも心に残る授
業ができれば教師として幸せなことだ

と思います。

大阪府堺市立野田小学校 中野貴之

●一人ひとりの

意欲で張りつめた教室

中三の美術の授業、透視図法を用い
た平面構成の色塗りの時間。美術室に
は、筆洗器で筆を洗うカラカラとい
う音が心地よく響いています。一様に
背を丸め、黙々と色塗りに取り組んで
いる四十名の生徒たち。その中で、曲
面を分割し、グラデーションを用いて
円柱形の立体感を表現している生徒が、
しばし手を止め、目を細めて自分の作
品を眺めています。近くにより「どげ
んね？」と声をかけると、嬉しそうに「こ
り。次の瞬間には、また、画面に向
かい色塗りを進めていきます。」

こうした、一人ひとりの意欲で張りつ
めた教室にいると、美術の教師でいるこ
との喜びが込み上げてきます。

授業が終わり、片付けの時間。先ほ
どの生徒の作品を囲って、小さな鑑賞

会が開かれています。「すごい。きれー
い」という声に誘われ、鑑賞者の数が
増える中、照れくさそうに、満足げに
にっこり笑う作者の生徒の笑顔に、また
喜びが込み上げてきます。

福岡県 P. N 美術のせんせい

●私と美術と生徒

「人は、この世界を美しいと感じる
時、生きる喜びや生命の大切さを感じ
る。一方、美しいものは、それを感じと
る心がある分だけ、存在する。だから、
美しいと感じる心をもちたい」

これが、私が美術を学び、美術教師
になった理由です。そして、今、退職
を前に振り返ると、美術と生徒から学
んだことが自分という人間の多くを形
づくっているように思えます。美術は、
答えや正解が予め決まっていないから面
白いです。生徒がどんな答えを出し
てくるのか考えながら教材研究をする
のもワクワクしてきます。出会わせたい
題材、出会わせたい材料や技法を見

つけ、生徒がたどりつく答えを私自身が
一番楽しみにしていたのかもしれませんが。
一方、作品に喜びや生き生きしたもの
が感じられないとしたら、それは、描
かされたもの、つくられたものになす
ぎません。そこで作品の優劣を評価し
ても虚しいだけです。

美術教師は、存在意義と生徒が美術
学ぶ意味を問いながら指導に当たりた
いものです。

神奈川県厚木市立睦合中学校 校長 小川朋子

研 鑽

東京学芸大学美術教育研究会

文 西村德行（東京学芸大学）

出会い、語り、考える

本研究会（略称 AEL:Art Education Laboratory）は、美術や教育をめぐる様々な私たちの議論を通して、これらの美術教育の在り方をデザインしていくことを目的とした研究会です。

第一回は本学OBの水島尚喜先生（聖心女子大学教授）をゲストファシリテータにお招きし「美術教育の方舟〜何を残すのか〜」をテーマに、活発な議論がなされました。

第二回は、さいたま市大宮盆栽美術館を会場に開催しました。テーマは「美術教育のこれから〜つくるをかんがえる〜」です。自然であり、かつ人の手によって形づくられた盆栽を鑑賞した後、「盆栽の仲間」を探すフィールドワークに出かけました。成果報告会では、フィールドワークで見つけた「盆栽の仲間」の画

像とその解釈について報告があり、つくることの今日的意義をあらためて考える機会となりました。AELは「出会い、語り、考える」ことで、美術教育の在り方を模索していきます。



今回は9月26日（土）東京学芸大学美術棟にて。問い合わせは E-mail:nishimur@u-gakugei.ac.jp まで

スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる！

- 1 スマートフォンまたはタブレットで、ストアアプリを立ち上げます。
- 2 「カザスマート」で検索し、アプリをダウンロード。
- 3 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
- 4 該当ページにかざすと動画がはじまります。



カザスマート 🔍





中学3年 [墨・色紙/27×24cm] 「美術2・3下」P.7掲載

生徒作品解説 私の見方

動きや速さ時間の流れなどは、どのようにすれば表現できるのでしょうか。古来、画家達は様々な工夫を凝らし、その表現に挑戦してきました。

剣道の一場面を描いたこの作品からも、作者の動きの表現に対する工夫が伝わってきます。画面の対角線上に力強く遠近感を強調して描いた竹刀や宙に舞う面を付ける紐と、しっかりと描かれた剣道の防具との対比から、「動と静」が表裏一体となって進行する剣道のイメージが伝わってきます。

動きを表現するにあたっては、材料や用具の特性を生かし、表現方法を工夫することも大切になります。この作品では、筆の使い方や描く速さ、墨と水によるにじみ、ぼかしやかすれの効果によって、豊かな表情が表現できる水墨の特性が、「動と静」を描いたこの作品の表現意図にうまく合っているとされます。

この絵はどのようにして描かれたのでしょうか。「筆はどちらの方向から、どんな速さで動かし描かれたのか？」そんな事を想像しながら作品を見るのも、作者の工夫や制作意図を感じ取る一つの方法だと思います。みなさんはどう感じますか？

文 京都市立芸術大学 教授 横田学

形 forme No.308-2015

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成27年(2015年)9月28日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5 TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

Cover photo: Kazue Kawase (YUKAI)

Design: Kazuhisa Yamamoto (Donny Grafiks)

CD33281

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690